

昭和三十四年七月二十三日發行
第三種郵便物認可
(毎月一回、十五日發行)

(通第一三四号)

慈

光

第十二卷

第五號

目次

選 択 相 伝 の 御 影	花 田 正 夫	(1)
宿 業 論 (歎 異 抄 第 十 三 章)	近 角 常 観	(3)
自 然 法 爾	波 岡 茂 輝	(9)
正 信 念 仏 偈 と 念 仏 正 信 偈	三 瓶 徳 英	(31)
自 と 他	信 国 淳	(61)

選択相伝の御影

花田正夫

親鸞聖人廿九才の春、いづれの行も及び難き地獄一定の身をもつて、吉水の禪坊に六十九才の法然上人をたずねられ、たちどころに雑行をすてて本願に帰入せられました。

その後照る日も、降る日も、嬉々として、花をたずねて蜜を集める蜂のように、禪坊に上人をお訪ねになつて、法雨を身心に受けられました。でありましょう。はからずも聖人三十三才の初夏に、特に恩師のお許しを得られまして、『選択集』を書写せられました。法然上人はこの写本に真筆をもつて

選択本願念仏集

南無阿弥陀仏 往生之業、念仏為本

釈 綽 空

と書き添えられました。「綽空」とは聖人が恩師法然上人から頂かれた名であります。即ち聖人が雑行をすてて本願に帰し給うた姿がいか



三河妙源寺蔵

にも道綽禪師が聖道門をすてて浄土門に帰入せられた模様とよく似ているところから「綽」の字と、更に源空上人の「空」の字をたまわつたのであります。

そのよろこびの日、聖人は法然上人の御影を申しあずかられて、図画されたのが、世に所謂、選択相伝の御影であります。『選択集』を相伝された記念の御影であります。

教行信証の末に、聖人はそのよろこびを

「選択本願念仏集は禅定博陸の教命によりて選集せしむる所なり。真宗の簡要、念仏の奥儀これに撰在せり。見るものさと易し、誠にこれ希有最勝の華文、無上甚深の宝典なり。年を渉り日を渉り、その教誨を蒙るの人千万火なりと雖も、親と云い疎と云い、この見写を得るの徒はなほだもつて難し。しかるにすでに製作を書写し、真影を図画す。これ専念正業の徳なり。これ決定往生の徴なり。よりて悲喜の涙をおさえて由来の縁を註す」と述べていられます。

その後聖人三十五才の時、念仏の法難のため、師弟ところを異にしての御流罪となられ、はからずもそれが、生別のままに死別となられました。然し聖人は、恩師の御影を肌身離さず奉持せられて、朝夕おがまれたことと思います。ことに二十首の源空聖人と讃を製作せられた時の、京洛晩年の親鸞聖人、

善導源信すむとも 本師源空ひろめずば
片州濁世のともがらは いかでか真宗をさとらまし
曠劫多生のあいだにも 出離の強縁知らざりき
本師源空いままさずば このたび空しく過ぎなまし
等々胸に湧き出る讃仰のお声も、この御影を前に、生ける恩師に物語られる如くであつたことと想われます。

さて私は幸に朋友にさそわれて、一昨年夏、かねての願いがかない三河の妙源寺に参詣し、宝物として大切に相伝されるこの御影を拝し、感慨無量でありました。文字通り後髪をひかれる思いでようやく退去いたしました。幸に写真版の御影を朋友から頂き、爾来仏壇にお祭りして日々拝して参りました。そして無声の教を数々頂いて居ります。

そのうちでも、この御影の、法然上人真筆の銘文のことでありますが、

南無阿弥陀仏、

若我成仏 十方衆生 称我名号。下至十声。若不生者 不取正覚。

彼仏今現在成仏、当知本誓重願不虛、衆生称念必得往生。

とあります。これは衆知の通り、善導大師の十八願加減の文であります。即ち法然上人は御自身の言葉は何一つ書

かれずに、大師の要文を誌して親鸞聖人にお渡しになつたのであります。

そこに「ひとえに善導による」と表白される法然上人の無我なお姿を拝するのであります。「唯善導大師の金言を身に稟けてそのまま伝えるばかりである」との御心に触れるのであります。

またこの銘文のおこころがそのままに「親鸞におきては

宿業論 (歎異鈔十三章)

(四)

近角常観

ただ念仏して弥陀にたすけられまいらずべしとよきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の仔細なきなり」とも「親鸞なにおしえてかわが弟子といわぬ」とも「唯可信斯高僧説」と、自然に師資相承されているのを直きくにかがわられて、崇敬おくあたわぬものがあります。南無阿弥陀仏。

十七 『凡数の撰に非るなり』

そこで申すのであるが、『観経』で章提希夫人が七重の獄に入れられて苦しんだ時、釈尊が降臨して章提希のために、諸仏浄明の国土を觀せしめ給うた時、章提希が申上げた言葉に、
世尊、我如きは、今は仏力を以ての故に、彼の国土を見たまつる。若し仏滅後の諸々の衆生等は、濁悪不善にして五苦に逼られん、云何してか当に阿弥陀仏の極樂世

界を見たまつるべきや。
『未來の衆生は五苦に逼られ見ることが出来まいが、如何して見奉りたら宜しかろうか』との意味の言葉なのである。それを善導大師が解釈せられた言葉に、
此の五濁五苦等は、六道に通じて受け、未だ無き者はあらず。常にこれに逼らる。若しこの苦を受けざる者は、凡数の撰に非るなり。
これが非常に味わいのあることと思わして貰うのである。

十八 自然法爾の生活

『この五濁五苦等は、六道に通じて、未だ受けぬ者は無い。常に之に逼らる。若しこの苦を受けない者は、それは、凡夫の数に入らないぞ』
との言葉である。そこで我々この苦しみが無つたらよからうというのであるけれども、苦が無かつたら五濁悪世でない。そこになると凡夫なる限り、苦の無いものとはないのである。

そこで昨年刊行の私の『慈光録』に、
『自然法爾は信仰円熟の極致也』の一文、あれは弥陀への、恵みに安んじた人生活を書いたのである。
我々こうやつて生きて居る、この生活自身が直に恵み、慈悲と、外界を攫えて言うのではなければ、人生かく一事として思うようにならぬ、この仕方の無きを憐れませ給う御真実一つに満足させて頂けば、人生の事は如何にあらうが、自分の計らひは残らず打ち棄てて、思召し一つに打ちまかせて、安心して暮らせて貰えるが

そこで信仰に心懸ける方が
『こんな苦しみがあるようでは、本当でない。どうかしてこの苦がないようになりたい。もつと喜べるようになりたい。信心頂きたい』
と、そう一途に思うて居らるる処へ、大悲の仰せは、
無明長夜の灯炬なり 智眼くらしと悲しむな
生死大海の船筏なり 罪障重しと歎かされ

ある。併しその中からも、決して
自然法爾の生活となるのである。又そこに行く、思わざる処に恵みが現れて下さることを屢々実験するのである。併しその中からも、決して
都合よくなるを恵みとする時は、ならぬ時は不足に思ひ易い。なるを喜び、ならぬを泣くにあらず、善きも悪しきもして見ようなきを、何処までも遣る頼なくのたまう御真実一つに腹ふくらせて貰えたが、お慈悲に夜を明けさせて貰うた味わいなのである。そこに『歌異鈔』一章に

これ聞かれるなり『あゝこの無明だもの、これで何が分るものか。この分らぬ、ここを見て下さるうとの思召しか』と、これに気づいて喜ばれる方がよくある。これが決して思ふごとく苦が抜けて、信仰が得られて、安心したもので無い。むしろ、
『分らぬ、苦の止まぬ凡夫』と、而して、『意外にもこの苦を見て下さるうとの御真実か』と、ここへ出て初めて安心させて貰えたものなのである。

『分らぬ、苦の止まぬ凡夫』と、而して、『意外にもこの苦を見て下さるうとの御真実か』と、ここへ出て初めて安心させて貰えたものなのである。

本願を信せんには、他の善も要にあらず。念仏にまさるべき善なき故に。悪もおそるべからず、本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえに。云々。

又、『口伝鈔』には、

聖人親鸞おおせにのたまわく、某はまたく善もほしからず、また悪もおそれなし。善のほしからざるゆえは、弥陀の本願を信受するにまされる善なき故に。悪のおそれなきというは、弥陀の本願をまたぐる悪なきがゆえに云々。

即ち、ただのこるは、仏の本願、恵み、思召、親心、光、真実、唯それのみとなる。この外に『こうあつたら』。

『あゝあつたら』というも、この恵み以上の善なるものはあることが無い。それはなる程長命も結構であるも、その結構は、絶対の結構ではない。善きあとには必ず悪しきが来りて、我々の善きは限りのあるよいである。むしろ私の善くあり得ないのを見て下さる仏の恵みを頂く、これ一つが、最もよいとなるのである。そこは、一度日輪が上ると、群星すべて光を失つて、ただ日輪のみ明らかなる如く、この世の善し悪しはすべて意味を失つて唯お慈悲一つが有難いとなるのである。

十九 善いことしようと思ぬのか、否。

そこで誤解のないために極言する。
信仰の生活に於いては、善いことしようと思ぬのじや、と思うと、これは大なる間違いである。私はむしろするのだという。しかし

しても、してゐる気でするので無いといつた方が更に適切である。

ところが、これいうと、ああ『そうか、善いことするか』とすぐこれに取られて困るのである。昨年も或人に、私の苦しんだ時の話して

『私の苦しんだのは、人に隔てを取りたい、伸よくしたい。それに苦しんだのであるが、どうしてもその隔てが止まぬ。伸よくされぬ。処が最後に、その止まぬを見て下さるお慈悲で安心させて貰うた』

と、斯くいうと、その方は

『ああ、そうか。先生はどうも偉いことを思つたものである。どうも先生のと、我々のとは違う。先生のは自力の善ぐらいはやつた上の煩悶』

と、妙なことに思われてしまつたのである。全体私が人と和らぐと苦しんだのを、善と思われるのもおかしい。全体私は何に苦しんだか。人に隔てぬよう、伸よくされるようにと言うと、何か人にしてやる方の如きも、実は、人に善く思われたいためである。こちらからよくさえずると、人も善く思うてくれるからと。

而して信仰に氣附かして貰うまでは、それが何か善でもあるかの如くに思うて居つたのだから、善いことしようとして出来なかつたという言葉を用いて申して居るのである。

因果に暗からずは、ここで初めて味わわせて貰えるのである。

二十 業に罪を負わせて貰うまでにはしようのないもので。

これはお慈悲を知らせて貰うまではしようのないもので、私など苦しんだ時は、自分は善くせんとするのだけれど、如何せん、人が我に善く向わぬから出来ぬと、出来ぬ因は人にある如く思うて居た。

此間も千葉に参ると、或人の話に、或医師が無免許で治療していたのを検事が告発して、終にその医師が入監しなくてはならぬことになつた。するとその医師が獄中で毒を飲んで死んでしまつた。まだ苦しんで居る時に、一巡査が行つて、『何故死ぬようなことをしなくてはならなかつたか』と聞いたたら、その男は『貴様達が告発したからだ』と答えた。どうも人の死なんとする時、言うこと善し、というけれど、最後までひどいこと言う奴があると話された。

ナニ私共、お慈悲が解るまでは皆これなのである。『こちらら解け度いだけれど向うが打ち解けんから、向うがよくせぬから』と、何処までも原因を人に帰して行く。

設えれば西歐の戦争にしてからが『こちらら止めたいのだけれども、相手が止めぬから』と、処が結局はそれ故いつまでも止められず、言うてる自分が不足しまいで終らねばならぬことになる。処が意外にも予てからそこを見て

下されて、その止められぬは、

『それは汝の性である。故にその性分の汝が可哀想なばかりのわが親心ぞ』と、これ知らされると初めて、

我が身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、常に没し、常に流転して、出離の縁あることなしと深信す。

『成る程、これが自分の性だったもの、人に不足の止みよ
うは無つたはずである。この性で人に向つて居たの、だも
の、人も不足に思つたはず。成る程これは恐ろしい自分の
業であつた』と、ここで
初めて我が身の業が分るとなるのである。

ところが大低の方が『これも前生の宿業、因縁、約束だ
からしうが無い』……そう言うてそれで業が分つて居る積
りて居らるるは大間違ひである。業は誰の業かというに、
自分の業である。昔からよく『我が身の業のあらわれがは
ずかしい』という言葉があるは、自分の業だからである。
それをよく信者の人など、何か悪いことであつた場合など
に『これも業のなしわざだからしかたがない』と投げやつ
て居るは、
業に責任を負わせ、業に罪を帰して、突きやつて置くもの
である。

それでは業が分つたにならぬ。業は、私の仕方の無いの

と、余りひどく言われると、『誰だつて破ろうと思つて破
つた者があるものか』となつて『悪う御座いました』と言
えなくなつてしまふ。処が『イヤ大切な茶碗だけれど、併
し誰だつて壊すことはある。そう言う自分が折々こわす。
誰だつて破ろうと思つて破る者は無いのだから』と、そこ
を見て言うてさえ貰えろと『イヤ私が過失をして悪うござ
いました』と頭が下る。

同様に、我々『恐しい自分の業であつた』となるはその
業を見て下さるお慈悲がなくては、我々初めから諦めは出
やせぬのである。我々自分の思ふようにならぬを何処まで
も遣る瀬なく見て下さるお慈悲の故に、終にこちらがその
御真実の程にほだされて、如何に我慢な私も、終に我慢の
角が折れ

『あゝ何処までも恐ろしい業の自分であつた』
と分るのである。

故にお慈悲いただくまでに、我々が思つて居る善悪因果
は、それは何処までも結果目当て。故に真実このお慈悲で
満足させて貰うたでない限りは、仮令念仏称えようが、仏
にすがろうが、そうして極楽に往こう、心安く居ようの信
心であつて、故にこれを
罪・福・信・と・いう。即ち罪あれば、禍を得、善くすれば福を得
る。故に善くしてよくなるうの信心である。故にこの絶対

が私の業であることを哀れみ、お見捨てなき御真実に、終
にこちらが畏れ入り、満足させて貰つて、成る程仕方のな
い私でありましたと、頭の下つた時が、初めて我が身の業
の程が分らせて貰えた時なのである。

二十一 本願と宿業

それ故、初にいう『歎異抄』十三章書き出しの文には
弥陀の本願不思議におわしませばとて、悪をおそれざる
は、また本願ほこりとて、往生かなうべからずというこ
と、この条本願をうたがう善悪の宿業を心得ざるなり。

これは弥陀の本願不思議の故に、
何処までも我が身の悪しさを気にせなというが、真宗の本
當の信仰である。

処がそれをとらえて、そう云うて居るのは本願誇りだと
言う者があるそんなこと言うて居るのは、本願を疑う善悪
の宿業を心得ぬからだのお言葉である。

ところがこの『本願を疑う善悪の宿業を心得ぬ』とあ
るのが即ち、
本願が分らぬのが善悪の宿業が分らぬのだからである。本
願が分れば宿業は分る。しかるに多くの人がお慈悲は分ら
なくても、業は分る気で居るのがいかぬのである。

早い話が、女中か何かが、過つて茶碗を破る。その時に
『何故そんなことをしたか、何故そんな過失をしたか』

の恵みに夜が明けるまでの信仰は、皆罪福信である。

そこになると我々の修養ということにしても、成る程自
ら善くなるうと努めるはよいようであるけれども、その目
的は矢張り善くしてよく思われたいになる。それは自ら意
識して居るか、居ぬかはあるも、結局の処はそこになる。

処が人間は、この外に考の出ようがないから、何人も皆こ
れでやる。やりた結果は終に、その自力で行き得ないこと
に突き当りて、而してここに意外にもその仕よりのなきを
何処までもお見捨てなき御真実にあわせて頂いて見れば、
我々が善したからよい、せぬから悪い。念仏称えるから善
称えぬから悪と、そんなことに係わるお慈悲に非ず。何処
までも、私のよしあし思いにまかせぬ、して見ようなきを
哀れみ、お見捨てなき御真実と、その者が、これに満足さ
せて頂いたのが破闍満願。

しかしこれを知らして貰うて見れば、成る程、このしよ
うの無い自分の身であつたもの、兎の毛の先ほども思つた
うにはならなかつた筈と、これが分らせて貰えたのが、宿
業が知らせて貰えたのである。

聖人の常の仰せには

『されはそくばくの業をもちける身にありけるを、助
けんとおほし召し立ちける本願の添けなきよ。』

と。以上、宿業論を話させて貰うたのである。

「求道」大正八年二月。

自然法爾

— 信仰の三階段 —

波岡茂輝

信仰の階段を区別することが出来る。一は物質的、又は功利的なもので、自分の恐怖を自分の力で排除する事が出来なため、或は自分の抱いている願望を自分で達成することが出来ないため、超人的な偉力、即ち神仏に依属し、その加護冥助によりて、恐怖を避け、願望を満足しようとするもので、彼の火災盜難等の禍を除き、怪我疾病を治し、貧困落魄を救い、その他あらゆる災禍を転じて幸福となさんとして神仏に祈願し、宗教的形式を行うものである。換言すれば、物質的、経済的な現世利益のために神仏に帰依する信仰である。

二には、哲学的考察、理論的研究から神仏の存在を肯定し、その慈悲を推定し、これを正しくして唯一なるものとして信仰の根本義とし、以て安心立命せんとするものである。第三には、よき人の仰せを蒙りて別の仔細なき信仰で、信仰のための信仰である。様なきを様とする信仰、無義為義の信仰、自然法爾の信仰である。

第一の信仰も人によつては一時的に、或は相当に永く安

は究竟の真理をつかみかねた場合でも、外に方法がないから、姑息曖昧ながら妥協的に、苟且的に満足しているものもある。いずれにしても、この種の信仰を抱く人は純真な青年、学者、思想家と称せられる人に多く、彼等は概念的に、外部的に思索して、物の真相に触れない、特に思索哲学する本体たる自我は措いて問わない故、その真理と主張するものは自分の軀に似せて掘つた穴に過ぎない事を知らないで、普遍妥当のものと信じている。独り得々として確實完全なものとして信じている。惜しい事だが、担板漢と称せざるを得ない。然しこれは物の内面真相にまで深く突き入つて検討しないから来る誤で、相對世界に住み馴れている人の陥る通弊である。物の真相を突き止めず、特に自己の道心の如何に貧困でたよりないものであるかについては殆んど吟味していない以上、それによつて打ち立てられた信仰は何等の權威も持つていないのは当然で、如何にそれが精緻にして構想堂々たるものでも、砂上に築いた樓閣に過ぎない。

更に言う。今ここに一本の矢が何処からか飛び来つて、心臓を射貫いたとする。その矢の竹の長さ、性質、羽の種類、色合、飛び来つた方向、射手等を如何に精密に研究しても、射られた人の苦痛は去らない。唯早く抜くことが彼を救う唯一の道である。精神の分析、心の作用、行為の善

心の境地に陶醉していることが出来る。然し他の恐怖に襲われたり、他の欲望に燃えたりした時、それが救われないとか、成就されなければ、再び悶え悲しみ、天道是非非乎と泣いてその信ずる神仏をさえ呪う事がある。かゝる信仰は益々煩惱を盛んならしめ、迷妄を深くするに過ぎない。世の信心者と称せられる殊勝らしい人は多くこの種の信仰を抱いている。時に此の人がと思われる高位高官の人、学者と称せられた人で、こうした信仰を抱いておるのに驚かされることも少くない。この種の信仰は信仰中最も低級のもので迷信と称せられるものの中に含まれる。

第二は前者より思想的に高尚な理智に富んだ人の信仰で、どんなものでも分析し解剖し綜合し、そして得た結論を合理的であり、真理であるとして、これを唯一の據処とする信仰である。謂わゆる自心建立の信である。

かゝる人々は自分に信用を措いているから、自分の考究し編成したものでなければ満足が出来ないのである。中に悪、環境の適不適、更に宇宙の現状を如何に巧妙に穿鑿しても決して人心の不安苦痛が去らない。端的に心の問題に突き入つて拔苦学樂の法を講ぜねばならぬ、それにはどうしても本當の信仰にまたねばならぬ。

第三の信仰は、信仰のための信仰で、思索でも、行動でも、追えば追うほど却つて本當のものから遠ざかり行き、遂に自力の行き詰りに出会い、神秘的な大飛躍をなした時の信仰である。

思弁、実践、反省を排斥するのではない、その半端な、煮え切らないのに安んじないで、更に深く突き入つて、遂に自力の為すなきを感じた時に、本當の信仰を獲取するといふのである。

自然法爾は、親鸞聖人の最も緊要とせられた信仰の核心をなすものである。されば初めは八十六歳の御時、末燈鈔に掲げられ、重ねて八十八歳にして和讃にも掲げられている程である。次に末燈鈔の第五章の方を引く。

自然法爾事

自然というは、自はおのずからという。行者のはからいにあらず。然というはしからしむということばなり。しからしむというは行者の計にあらず。如来の誓にてあるが故に法爾という。法爾というはこの如来の御誓なるが故に然

らしむるを法爾というなり。法爾はこの御誓なりける故におよそ行者の計の無きを以て、この法の徳の故に然らしむというなり。すべて人のはじめてはからわざるなり。この故に義なきを義とすと知るべしとなり。

自然というはもとより然らしむることばなり。弥陀仏の御誓のもとより行者の計らいにあらずして、南無阿彌陀仏とたのませたまいて迎えんと計らわせたまいたるによりて、行者の善からんとも悪しからんとも思わぬを自然とは申すぞと聞きて候。誓のようは、無上仏に成らしめんと誓いたまえるなり。無上仏と申すは形も無くまします。形もましまさぬ故に自然とは申すなり。形ましますと示す時には無上涅槃とは申さず。かたちもましまさぬようを知らせんとて始めて弥陀仏と申すとぞ聞きならいて候。弥陀仏は自然のようを知らせん料なり。この道理を心得つる後にはこの自然のことは常に沙汰すべきにあらざるなり。幸に自然を沙汰せば義なきを義とすとすという事はなお義のあるになるべし、これ仏智の不思議にてあるべし

この御筆に対して卑見などを加えるが如きは却つて真意を誤り、真生命を冒瀆するの恐れがあるが、未だ信仰の意義に倣しない求道者に対して、解釈をさつと述べる婆心を同時に摂取不捨の慈悲にあうのである。吾等の狭い経験の無力な事を知つたときに、吾等の経験の以前より弥陀が吾等のために働きかけておいでになつた事が判るのである。無義は如来の誓願で行者の計らいのないのが、信仰生活の最も大切な核心である。

自然というのは元来然らしめ、如来の願力のしからしめ給うので、吾等の思慮分別に先んじた先験的のもの、神秘的のもので願力を信じたものは諸善も及ばず、業報も感ぜず、天神地祇も敬服する程の偉大なものになるというの、ひとえに如来の完成された修行の結果、大慈大悲の力によつて然らしめられるので、念仏の功德、信の力を疑うは、凡慮の所為である、如来の御計らいは凡慮をもつて批評すべきでない。

弥陀は而も、吾等に対して哲学的考察も、倫理的努力も、祈禱も、律法も、信仰もその他、如何なる條件をも要求せられない。吾等は単に丸裸になり、両手を放して、素直に弥陀の慈懷に抱かれ、ばよい。それは自然である。所謂願力自然、無為自然である。但しその自然は吾等の感覺情意に映ずる外面的な、宿命的な、常識的自然とは嚴重に區別されねばならぬ。

誓願の有様は行者を無上仏たらしめんと誓われたのであ

許してもらおう。

信仰は自力をもつてつかめるものではない。それは大海の水を杯を以つてはかるより難事である。ひとえに弥陀仏の五劫思惟の本願の賜特、弥陀仏の衆生の為に計らわせたう廻向の賜物である。「自ら然らしむ」には何等吾等行者の力が交つていない。若し少しでも加らば、それは作爲で自然ではない。法爾は弥陀の御誓なるが故に然らしむるといふが法爾で、やはり全く行者の計らいが含まれていない。弥陀の絶対慈悲の御計らいで、念仏して往生を遂げさして頂くので、純他力である。行者の能力がすぐれ、行の善く、思想の深遠、智識の豊富なるが為に、特に選ばれて往生を遂げるのではない。

法然上人は一枚起請文に一代の法に精通しても、愚鈍の身になして、尼入道の無智と同じように智者の振舞をしないで念仏せよと仰せられである。吾等如き、一代の經典はもとより、世俗の事情にさえ通じない、常識さえ怪しげなものに至つては、不可思議なる誓願を信するより安心の道も往生の法もない。否、本当に自分の凡夫に呆れはてた時初めて光明赫灼たる弥陀仏の勅命を聴くのである。聴くと

る。無上仏は色もない形もない、真如実相の姿である。無上仏の凡夫の對象として表わし給うた人間のな弥陀は阿彌陀仏である。弥陀仏は大海の水である。吾等は如何に濁つてもその中に流れこむと同じく鹹味を帯びる。信じさえすれば吾等も弥陀と同じになれるのである。絶対救済の廻向がなかつたなら、我等の力でどうしてこうした事が出来よう。要するに弥陀仏は凡夫に自然法爾の意義を知らしめ給わんがために姿を現わし給うたのである。

以上私は自然に就いて種々の言議を弄して来た。顧みて忤悞たるものがある。自然は言亡慮絶の神秘である。言え言う程自然から遠ざかる。維摩詰のように黙した方がよいかも知れない。けれども黙しても一向判らない。つい言いたくなるのも畢竟煩惱の所為である。唯然し、「弥陀はエナージイである、信仰は自然の力に屈服して諦めることである、念仏は宿命に安んじた感謝の声である」などと誤解している人の為には到底黙して居られない気がする。念仏は徹頭徹尾のお任せである。信仰がひたすらに弥陀の御計らいで、卵の毛のさきほども行者の計らいが交つたらすでに千里の隔を生ずる。ひとえに仏智不思議と言う外はない

正信念仏偈と念仏正信偈

三 瓶 徳 英

浄土真宗に因縁の深い人は、正信偈ということは子供でもよく知つて居ります。その正信偈が二つある事は、檀信徒の大人でも知つて居られる方が案外すくないかもしれませぬ。

親鸞聖人五十二の御作と云われる教行信証の行巻の終りにあるのが、正信念仏偈であり、聖人八十三の御著作、浄土文類聚鈔の中程にあるのが、念仏正信偈であります。正信と念仏の二字をつつを、上と下とに置き替へられてあります。私は後者を文類正信偈と申します。どちらも七言、百二十句で、内容も、意味も同じであると思ひます。

この二つの正信偈の御構成は同様で、総標と、浄土三部經、ならびに七高僧の自信教入信の御著書によつて作られ、始より四十四句までは概ね三部經によられ、次の七十六句は、七祖聖教の概要であります。

私は近年、毎日一度は文類正信偈を拜読して居ります。此偈を読み出した気持を云うて見ますれば、両偈はすべてが同じでありますけれども、処々に、別の文字を以て書き

あらわされ、文句の音律の響きが、誠に尊く、氣高く、漢文のままで読むのが意識で読むよりも有り難い感じがしたのであります。

○
又正信偈は、依経段の終り、依釈段の直前に
弥陀仏本願念仏 邪見橋慢惡衆生
信樂受持甚以難 難中之難無過斯

なる四句があります。この邪見橋慢について、邪見は横着心、橋慢は遠慮心であると、近角常観先生から聴かせて頂いたことがあります。本願他方の真宗を聞いても、横着な私は、造惡無碍の邪道におちいり易く、或は、如来の大悲に遭いながら、惡を心配して、大悲を離れ、自分でよくなれる様に高上りする橋慢は、本願に對する遠慮で、歎異鈔十三章の本願ほこりにおちいり、共に安心の道がふざがれるのであります。

それ故、信樂受持、即ち、信心獲得が出来ぬ、此様な者の獲信は、難中の難で、殆んど救済不可能の者である、と

の御文勢であります。

然るに、本願念仏は、救済不可能の者を可能ならしむる不可思議の願力成就であることの実例として、七高僧をとりうして、聖人の信念を御示下さるのが、正信偈であろうかと恐察するのであります。

御和讃に、

五濁惡時惡世界 濁惡邪見の衆生には

弥陀の名号あたえてぞ恒沙の諸仏勸めたる

と。近角先生は、「何がどうあろうとも、どこ〜〜までもお見捨なきお慈悲だ」と教えて下さいました。

又、池山先生の「慘憺たる悔の残せし一一の、跡かたもなき無碍の一道」の御歌などの御教示を思い出し、邪見も橋慢も、横着や遠慮の暗い影は消え果てて、唯念仏に引き立てられ、新しいスタートが出来るのであります。

○
文類正信偈では、依経段と依釈段との間に、邪見、橋慢のお言葉なく、

惑染逆惡齊皆生 謗法闍提廻廻皆往

の句をお書きなされてあります。

此処は両偈ながら、別の文字を以て書き示して下さい、邪見、橋慢に引つかかる私に、この闕所を取り除いて、すらすらと読んで通れる様に、特別に御教化下さるよう

われるのであります。

○
称名念仏に就いて、文類聚鈔の中に、「大行と云うは則ち無碍光如来の御各を称したてまつるなり、この行はあまねく一切の行を撰し、極速圓滿す、故に大行と名く。このゆえに称名はよく衆生の一切の無明を破し、能く衆生一切の志願を満て給う。称名は即ち憶念、憶念は即ち念仏、念仏は則ちこれ南無阿弥陀仏なり」と仰せられてあります。

○
三部經の中に、南無阿弥陀仏の文字が出て居るのは、観無量寿經の下品上生と下品下生の二ヶ所であります。

○
私は説經の心構えに就いて、禅宗の和尚さんから、起死回生とでも云う程の活を入れられたことがあります。

それは四十年前のことでありますが、和尚さんの御親戚の家に仏事がつとまり、接近して一緒に、観無量寿經を拜読した時、下品下生の、十惡不善の人の末期に念仏せよと勧められ、十声念仏した悪人が罪消えて、極樂世界に往生したという経文、「称、南無阿弥陀仏」のところ、和尚さんは、お経を押しいただき、経卓の上に置いて、合掌黙礼された時、平気で読んでいた私は冷汗が出ました。その時以来、この經の下品下生のところを拜読する度毎に、

丁寧に頂かずに居られなくなり、誠に厳しい、活教誡を蒙り、只今も身に泌み感謝して居ります。

近角先生、称名念仏に就いて御講話の時、

「自分が広島の鞆たづもに行き、池山君と一緒に、明円寺で講演した時、全君曰く、寺で話すのが一番よい。なぜなれば何時念仏しても平気だが、学校の講堂や、公会室などで話す時、念仏が出れば、しつくりしない様な場合があるが、寺ではらくらくと念仏出来て、そんな心配がないと話された」

と承りました。

私は近角先生から頂いた、

終歳講題五十三 善財求道去趨南

百城正達明徳 靈界參同弥勒龜

の御詩の御直筆の半折を掛軸とし、又昭和二年不審の点を手紙で御伺いした時、直に御返信を頂き、御元氣な潑測たる御筆跡でありました。その一節に

「不浄説法の御懺悔、御同様に奉存候。可愛想にと御思召し下さるお慈悲という事が、肝要に候。普通なれば、悪きものなれば退け、浅間しきものなれば、相手にせられざるが当然なるに、これをよくも退けず、可愛想に御

と、良寛和尚の詠、

世の中にまじらぬとはあらねども

ひとりあそびぞ われはまされる

などが思い出されます。

ただ念仏 われ救わるる威神力

鼻の奥でただ念仏するパスの中

念仏は親なり子なり財産なりこれ一つにて万事オーケー

世の人のにくみそしりも何のその強き力にまもらるる

自 と 他

考えて見ると、人間の「我」という意識はまことに奇妙な構造をもつものである。それは二重の構造であるといつてよい。云うまでもなく「我」の意識は、われわれがすべての他なるものから自己を分別する意識である。世界から自己を分別し、すべての他人から自己を分別して、自己存

思召し下さる次第に候。さればこそ超世の悲願とも申され候云云」

の御手紙と、奥様御代筆の御手紙を頂いたものを切り合せて掛軸として拜見し、又、信仰の余瀝等を拝読して常に御教訓を蒙つて居ります。

私は数え年八十になりました。釈尊は八十で二月十五日に入涅槃遊ばされたと聞きます。愚悪の私、老境の奥に達したと見えて、よくものを忘れ、足が弱くなり、鼻汁が出る。剛情や愚痴が強くなる。邪見傲慢がむくむくと動く、まことに始末のつかぬ頑固爺となりました。これでは他人に嫌われるは当然で、自分でも嫌気がさします。

昔の時代なればとくに姨捨山に行かされる組でありました。姨捨山は信州まで行かなくても、私の国の断魚溪の奥にも同名の山があります。又今は子捨川が出来たとききました。それでそのに、私は有難い時代に生れ合わせ、御同朋から米や野菜を沢山頂き、粗末な隠れ家から日本海を背景とした石見富士の活画を四キロメートルの前方に眺め、ラヂオを聞きながら、晴耕雨読のまねをして、世界一の養老院に居らせて頂く氣がします。利井明朗和上の歌

我からはすてがたかりしこの世をば
今はすてられこころやすけれ

みは

愚痴に泣き、愚痴に笑うて今日もまた、親子ぐらしの

南無阿弥陀仏

日毎／＼日の入る西の空恋し、亡き父母のいますとお

もえは

うつし絵よ、ありしその日をそのままに、亡き人とし

もおもほえぬ哉

昭和卅五年二月十五日。

仏の涅槃会の日稿す。

信 国 淳

在を意識するのが、我々の「我」という意識である。そうして見ると、その分別は、もともと世界や他人がなくて成り立ちようのないものである。われわれが「我」というとき、もうそこにはその「我」から分別された世界や他人があるのだし、逆にまた、分別された世界や他人が

そこにあるので、「我」が「我」として分別され意識せられるのである。

つまり世界や他人がなくては自己もなく、自己がなくては世界も他人もないというのが、我々の意識の客観的な構造である。だから我々には、たとい他人といつても、それはすべてそのような相依相関の關係で自己自身に繋がっているであつて、両者は本来一体を成り立たせているといわねばならない。

ところが一方、その他人は、他人として自己から分別され、意識されている以上、決して自己であるはずはなく、自己も亦決してどんな他人でもありえない。両者は却つてそれぞれ独立の存在として互に距離をおきながら、ただ対立的にしか關係がもてない。

だから自己は飽くまでも自己であり、他人は何処までも他人であつて、両者の間は完全に遮断されていると思わずにいられぬということも、またやはり我々の紛れもない意識の事実である。そして実際、こういう意識の支配下で生活が続けている關係から、我々が何かにつけて他人を無視し、傍若無人な生きざまをして、しかも何ら恥じることがないといつても、それはまつたく止むを得ぬことなのかも知れない。ただししかしこういふ事は、我々の分別意識において、「我」がどんなに深い自己矛盾に陥つてゐるのかとい

係をつつむ、「我」の生活の場のことだと思われる。穢土浄土などという、現代の我々には、まるで何か迂遠なこととしか思えぬけれども、その「土」というのは、実は我々の現実に生き、現実に意識しているこの「我」の生活の場、自他關係を内包した、この「我」の生活の場所のことにはかならない。

そしてそれが穢土であつたり、浄土であつたりするといふのは、我々の自他關係が、そこで矛盾対立に陥つてゐるか、それともそれが矛盾から解放され、自他本来の結合關係が、そこであらわな現実になつてゐるかどうかといふことで決定されるといつてよい。

そうだとすると、穢土、浄土の問題は当然われわれの「我」の意識の問題に帰着せねばならぬということになる。しかし、他人から分別された「我」の意識は、前述の通り、自他存在の矛盾的構造を包んだものに過ぎぬから、そこには穢土のほかは成り立たぬ。われわれの日常的な「我」の世界は、いつ、どこ、たれの場合にも、常に穢土としかないのである。

ところで『無量壽經』を見ると、その下巻に、「その国逆違せず、自然の牽く所なり」といふ有名なことばがつてゐる。「その国」は安養国と呼ばれる浄土であるが、それが逆

うことを、遺憾なく示していると云えるであろう。何しろそこでは、他人を俟つて初めて成り立つその自己が、畢竟矛盾的に対立するものとして他人と關係をもつたけなのである。そして我々の生きることが、誰の場合にも結局、排他的、独善的にならざるをえぬ唯一の原因は、ほかの何処にあるのでもなく、ただこの「我」の意識、——他人から分別された「我」の意識に於ける自他の矛盾的構造にあると云わねばならない。そこでは自他相互の本来の依存關係が、自他相互の矛盾關係によつてまるで覆ひ隠されてゐるのである。

そういうことで、我々は、自己の欲する場合だけは、流石に他人と一つに結合する様子を見せるけれども、いつたんそれを欲せぬとなると、ただ結合を拒否するばかりでなく、自からそれを破壊することにも容赦がない。

我々の家庭の不和、社会の鬭争、乃至世界の対立というようなことも、このわれわれの我の意識の構造と決して無縁であるのではない。

その矛盾的構造が拒否され、そして自他一体の本来の「我」がわれわれのうちに実現されぬ限り、我々はただこの修羅の世界だけが、我々の世界であると信じたままで、この世を終つてしまわねばならぬ。

浄土門仏教で「土」といふのは、かような我々の自他關係をいふことではない。いつたい經典で「国」とあるのは、我々のもつ世界意識のことであつて、我々の世界意識は、それを支える我々自身の世界によつて限定され、或は楽しい世界になり、或は苦しい世界にもなる。

安養国というものも、恰度そのように、逆違せぬ心によつて成り立つ世界意識であるに違ひなく、逆違せぬ心ということ、その世界意識の性格を「安養」として決定してゐるのだと解される。「安養」とは、我々の心が安んじ、いのちが養われるというほどの意味であらう。それで逆違せぬ心とともにある世界意識は、我々にそうした安養の徳をもたらす安養国だといふのである。

ところで、その「逆違」であるが、私は逆違といふことばによつて、われわれ人間存在を特徴づけるその反逆性と独立性とを想ひみないではいられない。実際、反逆性と独立性とは、われわれ人間の自我意識のもつ根本的性格である。自己は他人でなく、他人は自己でないといふ分別し、そして分別された自己一人のみを生きようとする我々には、如何にしても他人に対して対立し、反逆、それによつて自

己自身の独立を獲得せねばならぬ必然があるのである。そして我々の自他が矛盾するというその理由も、まったくこの我々の反逆性と独立性とにあることは明らかである。としてみると、そこに「逆運せず」と云つてあるのは、もはや我々の個別的な、相対的な「我」の心について言つたものでないことが、自然に了解されるのである。

ここに「逆運せず」とは、いかなるもの、いかなる人にも逆運せぬという、絶対的な意味をもつて言い現わされている。従つて此の「逆運せず」という一句は、実はそういう言葉で、我々にとつて全く思いがけない、全く素晴らしい、新しい「我」の顕現を告げているのだと見なければならぬ。何ものにも逆運せぬと云えば、それは我々のどんな他人からも決して自己を分別しない、そんなわれわれの「我」の心でなければならぬし、我々のいかなる自己と、いかなる他人とにあつても、等しく、直ちにその自己となり得るような、そんなわれわれの「我」の心でなければならず、云つてみるなら、我々人間全体の絶対的な「我」であるものの心でなければならぬ。

「逆運せず」とは、ただそのような「我」の心についてだけ云える事なのである。逆運せぬとは、表から云えば、随順するということである。それ故「逆運せずして自然に牽く」とは、そういう絶対的な「我」の愛の行為と、それが出来るのである。

浄土の慈悲とは、南無阿弥陀仏が慈悲をもつて、我々の土を浄めることである。「土」を浄めんがために、南無阿弥陀仏みずからが、我々の「土」そのものになることである。それが土になるというのは、南無阿弥陀仏が、我々の自己と他人のすべてを包んで、その自己になるといふこと、なることを誓うということである。我々の自己と、他人の誰一人をも捨てることなく、その「我」として自らを捧げつくすことを永遠に誓うということである。そしてその誓いによつて、南無阿弥陀仏がすべてのものに愛の結合をもたらすということである。

「一心正念にして直ちに來たれ、我能く汝を護らん」とは、そのような南無阿弥陀仏の久遠の愛を我々に告げていることばである。

そういう南無阿弥陀仏のことばに耳を傾けるかぎり、南無阿弥陀仏は我々に全く新しい土、新しい自他関係を見出させる。それは即ち南無阿弥陀仏と我々との間に成り立つ自他関係である。我々を自とすれば、南無阿弥陀仏は他なるものである、南無阿弥陀仏を自とすれば、我々の方が他なるものである。しかしもはや自他と云つても、南無阿弥陀仏は我々に絶対逆運せぬ「我」である。いつ、どこでても、我々のため「我」になりうる「我」であり、なり得て

をみわたせる愛の力について述べたものであるに相違ない。すなわち「逆運せずして自然に牽く」とは、そのまま「浄土の慈悲」を語るのである。

浄土の慈悲は、我々の土を浄める慈悲である。我々は自他の矛盾的对立を自らの土として、その上に不安と苦惱の生を食つているものである。しかしその対立を止め、自己の土を浄めるといふようなことは、もとよりわれわれの分限を超えたことだし、不安と苦惱は、当然「我」の免れ得ないところである。「宿業の身」とは、実にこういうわれわれの「我」の自覚のことにほかならないし、それ故それは、その「我」に必ず伴なう穢土の自覚でもあるのである。浄土の慈悲は、ただこの「我」の身土の自覚を通してのみ、我々から憶念されるのである。そしてその我々の憶念こそ、そのまま、浄土の慈悲の「自然に牽くところ」である。もうそこには、何物にも逆運せぬ、我々にとつての全く新しい「我」が来ているのである。それが即ち、念仏の信心、南無阿弥陀仏である。我々のため浄土の慈悲を行うのは、この南無阿弥陀仏なのである。

南無阿弥陀仏は我々に代つて、我々の土を浄める。浄めるのは、ほかの何ものによってもなく、ただ慈悲をもつて浄めるのであり、又慈悲のみがよく我々の土を浄めることである。しかもそれは、我々の誰にとつても真実の「我」である。だからこの「我」から云うなら、我々は誰もみな「世々生々の父母兄弟」たるものに違いない。南無阿弥陀仏の慈悲の中では、我々の自他すべては、同じ一つの命に繋がれた同胞として見出されているのである。

すなわち我々自身における、我々と南無阿弥陀仏との縦の愛の結合は、我々のこの土における、我々と我々のすべての他人との間の横の愛の結合をその内に包んでいるのである。それ故、我々も此処にあつて、南無阿弥陀仏とともに、既にして全く新しい「土」、慈悲の中の自他の新たな結合をもつことが出来る。

こうして南無阿弥陀仏によつて「土」の浄められることの上に、我々から初めて仰がれるのが浄められた「土」、即ち安養の国である。われわれの自他の矛盾が全く解消され、自他本来の一体性が完全に回復されている故に、われわれが我自身を成就して安養できる世界がそこにある。

「その国逆運せず、自然の牽く所なり」

まことに浄土の慈悲は「その国」から我々に来て、逆運せぬ心を南無阿弥陀仏の信心として、我々のうちに実現し、すべての他なるものとの一つの我を示しながら、我々の自他一切と共に「その国」に往生せん、世界と一つ「我」を成就しよう、というのである。

あとがき

韓国の大紛争、国内では炭労問題、安保問題が、今や論議を越えて、力と力の対立に及んで居ります。日本の文化がこうした経過を超えて真に根強いものとなりますようにと念じて居ります。

それにかえ、自然界は何時しか春の装いを脱いで、新緑風薫の初夏の空となりました。

あなたとうと 青葉若葉の陽のひかりの翁の句も思い浮びます。

○

△「宿業論」の近角先生の御講話はこれで終わりました。よくなるねばならぬでもなく、よくなるらないでもよいのでもなく、よくなるうとしてよくなるれぬ者を、可哀想と思召して下さる大悲一つを懇切に、微に入り細にわたつてのお教えを頂きました。

△「自然法爾」の波岡茂輝氏の信味は、信仰上の三段階のべてでありますので、真宗の真面目をこの方面から省みされます。

△三瓶翁の八十になられての随想を頂きました。

した。去る涅槃会には、頭北面西右脇の姿を真似て、入涅槃の仏を深く味わい、随喜せられた由であります。

△「自と他」は去年東本願寺の報恩講の時高倉会館での講話の骨子の由であります。

「願生」（専修学院発行、非売品）から頂きました。

○

滋賀県の笹さんが、右半身不自由な中を、発病以来の初の一人旅で来庵下さる。病身同志とてゴロリと横になつたままの談論風発、春宵の一刻を惜しみました。

又東京の大谷教学研究所から伊東豊明さんが来庵、近角、池山両先生のことどもを話し合い、予定の時間を遅らせましたのは恐縮。次に東京在住の神原静治さんが九州出張の途中、寸時を割いて来訪下さる。聞法の心しきりの御姿に引き立てられました。

山口の山根さん、滋賀の西川さん、大阪の大字さん、等々突然の御入来。一筋の白道の旅姿を見せて下さいました。

御案内

毎月、第一、二、三日曜、午後一時半、日曜例会。
五月二十四日、午前午後、昭和区小桜町、教西寺法話会。

○

福島政雄先生講話会

六月五日午前九時、栄町、文化会館、主催信道会館。
午後一時半、南区駆上町、一道会館、主催慈光社。

定価	一部	二十円	(送共)
半年	百二十円	(送共)	
一年	二百四十円	(送共)	
編集・発行人 花田 正夫			
名古屋市南区駆上町二ノ八八			
印刷人 本田 政雄			
名古屋市南区駆上町二ノ八八			
発行所 慈光社			
振替口座名古屋一〇四七〇番			